ウェディングは華麗に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウェディングは華麗に

【Ｎコード】
Ｎ８０４５Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
岩本真由子は結婚式を前にして何度目かのダイエットを決意した。しかしそれは苦難の道であった。彼女は今度こそ成功するのだろうか。女性の方にはおそらくよくあるお話です。

第一章

ウェディングは華麗に

岩本真由子は決意した。遂にという感じで。

「私決めたのよ」

「結婚はもう決めたじゃない」

会社のオフィスで休憩中に親友であり同僚である榎本智巳に突っ込まれた。見れば智巳はその髪の毛を茶色にしてカールをさせたうえで伸ばしている。目の辺りの化粧を特に目立たせている。わりかし以上に目立つ顔立ちがそれに余計に目立っているのだった。

「違うの？」

「だから。結婚なのよ」

真由子はここでさらに智巳に対して言う。

「結婚でね。決めたのよ」

「式の日ももう決めたわよね」

「ええ」

智巳の質問に答える。

「それも決めたわ」

「じゃああと何を決めるのよ」

智巳は醒めた視線と声で真由子に問うた。

「何もないじゃない。ドレスとかも決めたのよね」

「一応はね」

「それじゃあ後は待ってるだけね」

あはりクールな声であった。

「寝ていても。あんたは幸せになれるわ」

「もっと幸せになりたいのよ」

しかし真由子はここでこう言ってきた。

「もっとね」

「どうやって？あいてはお金持ちのボンボンで結構な大学を出て背

が高くてスポーツマンで人格円満」
まるで何処かのドラマに出て来そうな設定だが事実なのだった。
「顔も男前じゃない。止めに一族では誰も禿に薄毛はなし」
「随分よく知ってるわね」
「女の情報網をちょっと使えばわかるわよ」
それが智巳の返答だった。
「この程度はね」
「いえ、髪の毛のことまで」
真由子が言うのはそれに関してであった。
「よく調べたわね」
「基本よ」
智巳の返事は当然と言わんばかりのものだった。
「この程度はね」
「基本なの」
「禿位調べておかないと」
こうも述べてみせる。
「後で後悔するわよ」
「そうなの」
「そういうこと。それでよ」
ここで智巳は話を戻しにかかってきた。
「何を決めたのよ」
「それを聞きたいのね」
「あんたから話を切り出してきたんじゃない」
真由子に対して言葉を返してきた。
「何を今更」
「そうね。確かに」
「それで」
こう言ってからまた問うてきた。
「何を決めたの？全部決まってるように見えるけれど」
「痩せるのよ」

真由子の言葉だった。
「私痩せるのよ。どうかしら」
「痩せるの」
「ええ。駄目かしら」
「それ自体は何とも思わないわ」
返答はこうであった。
「それはね」
「いいのね、やっぱり」
「ダイエット自体はいいことよ」
こうも述べてそれは認めるのであった。
「それ自体はね」
「その割には何か冷たいけれど」
元々クールな彼女だったが今回は特に。真由子にはそう見えていた。
「どうかしたの？」
「どうかしたっていうよりかはできるの？」
そこを真由子に問うてきた。
「あんたが。本当に」
「何か随分ときつい言い様ね」
「だって当たり前じゃない」
また言ってきた。
「今まで私ね」
「ええ」
ここでは智巳の言葉を聞く。しっかりと。
「何度も聞いたわよ、その言葉」
「そうだったかしら」
「そうよ。記憶にあるだけでも五回目」
回数まで述べてみせる。言葉の感じがさらにクールになってきていた。
「五回よ。それでその五回が全部失敗してるじゃない」

「そうだったかしら」
「そうよ」
やはり言葉には容赦がない。本当に親友なのかと勘繰ってしまうレベルでの冷たさであった。それはまさしく氷の言葉であった。
「五回も。それも最初の段階で」
「記憶にないわ」
「私は記憶にあるのよ」
こう言って真由子を見る。目は細く少し吊り気味で肌は白い。黒い髪は短くしている。眉の形もよく鼻も低くはないすっきりとした形だ。口はやや大きく紅い。全体的にいい顔立ちをしている。ところがであった。また随分と太っていた。そのせいでどうにも美人と言うのとは少し違う感じになっていた。

第二章

「あんたが失敗し続けた記憶がね」
「そんな大袈裟な。記憶だなんて」
「じゃあ何て言うの？記録？」
やはり冷たい感じで真由子に問うた。
「思い出？いい思い出と悪い思い出があるっていうけれど」
「この場合は悪い思い出ね」
「わかってるなら自覚しなさい」
またしても冷たい言葉が出た。
「自覚をね。いいわね」
「自覚って大袈裟な」
「大袈裟でも何でもないわ」
智巳はまた言ってみせる。
「だって本当にそうじゃない」
「自覚がないって？」
「痩せたいのよね」
それをあらためて真由子に対して聞く。
「本気で」
「ええ」
真由子もまた真剣な顔でそれに答えた。
「そうよ。何があっても」
「じゃあ。真剣に努力しなさい」
「真剣になのね」
「そう、だったら協力してあげるわ」
ここでやっと親友の顔になるのだった。
「ダイエットのね」
「そうなの」
「もう一度聞くけれど本気なのよね」

それをまた真由子に問うてきた。
「本当に」
「ええ、本気よ」
はっきりと智巳に対して答える。
「嘘じゃないわ」
「わかったわ。それじゃあまずはね」
「まずは？」
「紅茶に砂糖は入れないことね」
「入れてはいないわ」
智巳はコーヒーで真由子は紅茶だ。見れば真由子のそれはレモンティーだ。色が少し薄くなっているのでそれがよくわかるのである。
「まずは合格ね。言うまでもないけれど」
「ダイエットに甘いものは禁物ね」
「そういうこと。ただし蒟蒻ゼリーとかは別よ」
「カロリーがないからね」
「どうしても食べたくなったらそれね」
まずは甘いものからだった。
「けれど基本的にはね」
「甘いものは駄目」
「クリープを入れないのもいいわね」
「そうなの」
「乳製品は結構太るのよ」
そこを指摘するのだった。
「牛乳もいいけれどここはやっぱり」
「何がいいの？」
「豆乳よ」
智巳が出してきたのはそれであった。
「豆乳がいいわ。それに野菜ジュース」
「成程」
「食べるのもお肉は駄目」

続いてはそれであった。
「特に牛肉はね」
「そうね。それは知ってるわ」
「鶏肉、しかもササミとか」
さらに言葉を続ける。
「お魚がいいのよ」
「お魚がいいのね、それもよく聞くわ」
「しかも小魚」
「それね」
「ええ。あと御飯は」
「御飯はどうなの？」
「麦を入れるか思い切って玄米にするか」
言うのはそれだった。
「玄米が理想ね」
「玄米嫌いじゃないわ」
真由子は答える。
「別にそれでも」
「じゃあそれで決まりね。食事はそんなところよ」
「それで終わり？」
「あとは三食しっかり食べる。外食もあまり止めた方がいいわね」
「お弁当の方がカロリーとか栄養をコントロールし易いからね」
「そうよ。それに一番大事なのは」
「何なの？」
また問う。本当に真剣であった。
「三食しっかり食べることよ」
「三食しっかりと」
「そう、規則正しい生活をすることが大事なのよ」
そこを強調して言うのであった。
「そこがね」
「それもよく言われることね」

「よく言われるからよ。ああそうそう」
さらに言い加える智巳であった。
「わかってると思うけれど夜遅くに食べるのと間食は駄目よ」
「やっぱりそうなのね」
「それ位なら朝にしっかり食べる」
それであった。
「いいわね」
「ええ。後は」
「運動ね」
次にはそれであった。
「あんた元々バレー部よね」
「ええ、そうよ」
智巳の問いに答える。
「だったら運動は慣れている筈だから」
「ランニングとか？」
「それと筋トレね」
その二つであった。
「朝起きて走って夕食の後、お風呂入る前なんかにね」
「毎日やるのね」
「わかってるじゃない」
「何度もやってるから」
ダイエットのベテランなのだった。実は。失敗ばかりしているにしろ。
「知識としてあるのよ」
「じゃあ後は途中で止めないことね」
「途中でなのね」
「一応聞くけれど」
智巳はまた真由子に問うてきた。
「今度は何？」
「あんたどうしていつも失敗してるの？」

問うのはそこであった。
「それを聞いておきたいけれど」
「辛いから」
「辛い？」
「ええ、身体がしんどくなってお腹が空いて」
困った顔で智巳に答えるのだった。
「それで限界になって」
「ああ、それははっきりわかるわ」
「わかるの？」
「理由がね」
こう真由子に対して答えてみせた。
「わかったわ。あんたまずしっかり食べなさい」
「三食しっかりとじゃなくて？」
「痩せたければ食べるのよ」
随分と懐かしい言葉であった。この言葉を聞くと肌が白くなりそうだ。それだけで。

第三章

「それはしっかりと守ることね」
「食べ過ぎないこと？」
「そう、それ」
智巳はそれも言う。
「それもよ。わかったわね」
「満腹感はいいのよ」
「あれ、お腹一杯でいいの？」
「栄養とカロリーさえあればね」
「ふうん、そうなの」
「あんた今まではあれだったでしょ」
智巳は真由子に顔を向けて問う。
「碌に食べずに無茶苦茶に運動してたでしょ」
「ええ」
彼女の言葉にこくりと頷く。
「そうだったのよ」
「それ全然駄目だから。いい？」
「うん」
その言葉にもこくりと頷く。その通りだったのだ。
「そうよ。それは駄目だったの」
「ダイエットはね。科学なのよ」
自分の持論を述べる。クールな声だった。
「わかるわね」
「ただがむしゃらにってだけじゃないのね」
「ああ、全然駄目だから。だからなのよ」
「成功しなかったのは。だから」
やっとわかったのだった。それがわかり。今までのことが空しくなるがそれ以上に目から鱗が取れた。そんな感じだった。

「だからだったのね」
「わかったら話は早いわ。それじゃあ」
「ええ。まずは朝早く起きて」
まずはそれだった。
「ランニングしてなのね」
「頑張りなさい」
クールに智巳に述べた。
「ウェディングドレスを奇麗に着たいんでしょう？」
「ええ」
その気持ちには変わりない。だから今こうして話もしているのだ。
「だから」
「私も付き合うから」
「いいのよ、そんなの」
それは断る。幾ら何でも悪いと思ったのだ。これは彼女の気遣いだった。
「そこまでしてもらわなくても」
「いいのよ。だって私も」
「智巳も！？」
「丁度ダイエットしないといけなかったし」
「貴女はそうは見えないけれど」
怪訝な顔で智巳に問う。本気でそう思えなかったのだ。
「それでもって」
「色々と事情があるのよ」
無表情で真由子に答える。
「色々とね」
「！？どういうこと？」
真由子は今の智巳の言葉の意味はわからなかった。目を白黒させていた。
「話がよくわからないんだけれど」
「そのうちわかるわ」

やはり言おうとはしない。
「だから今はね」
「そうなの。けれど本当にいいのね」
ここまで話してまた智巳に尋ねる。
「一緒にダイエットして」
「家が近所同士だし丁度いいじゃない」
やはり答える声はクールなままだった。
「そうでしょ？都合がいいとそれに乗ることよ」
「それになのね」
「じゃあ御願いね」
「ええ。それじゃあ明日からね」
「わかったわ。二人でね」
こうして二人でダイエットをすることになった。まずは朝早く起きてランニングをしてしっかりと朝食を摂る。仕事場でもできるだけ歩い昼食は弁当だ。夜は早いうちに夕食にしてそれから入浴の前に筋肉トレーニングだった。それを少しずつやっていくのだった。
真由子のアパートの風呂場で。二人は一緒に入りながら話をしていた。智巳は髪を上で纏めている。髪の短い真由子はこのままだ。そのうえで二人仲良く浴槽に入っている。真由子は顔中に汗を流しながら智巳に対して問うのであった。
「ねえ智巳」
「何？」
真由子の言葉に顔を向ける。
「お風呂も長いのがいいのね」
「そうよ。これはわかるわよね」
「ええ」
智巳の言葉に頷いてそれから述べる。
「長風呂ダイエットね」
「それで汗をかいてね」
「汗をかくのも大事なの」

「新陳代謝」
まずは一言だった。
「それなのよ」
「それなのね」
「ええ。それでね」
智巳はさらに言う。
「後で水分を取ることよ」
「水分も？」
「水分も大事よ」
それもまた言うのだった。
「しっかりとね」
「汗をかいた後も大事ってことね」
「そう、お水をたっぷりと飲むとね」
「お水を飲むといいの？」
「豆乳や野菜ジュースだけじゃなくてね」
「ええ」
智巳の話をしっかりと聞く。二人は浴槽の中で向かい合っている。
言うまでもなく一糸纏わぬ姿でである。
「お水もいいのよ」
「どうしてなの？」
「腸がね。奇麗になるの」
「ああ、お水で流されるのね」
それは聞いてすぐにわかった。
「それでなのね」
「言うまでもなく便秘は点滴」
強調するのはそこであった。
「だからよ。わかったわね」
「成程ね。そういえば」
「何？」
「実は私便秘気味だったのよ」

恥ずかしそうに笑ってそのことを告げる。顔は俯いている。
「やっぱりそれもあったのね」
「便秘には運動と食事よ」
智巳の返事であった。
「だからそれも兼ねてのダイエットよ」
「便秘はやっぱりよくないのね」
「勿論。だからこそ」
「わかったわ。お水も飲むわ」
「水道水がまずいのなら一旦沸騰させてからね」
そうした細かい心配りも忘れないのであった。
「そうすると余計にいいわ」
「そうね。じゃあそれも作っておくのね」
「しかも」
ここで智巳はさらに言ってきた。
「しかも？」
「その際お水は冷蔵庫で冷やしておいて」
「ええ」
「朝起きたらすぐに飲むのよ」
「それがいいのね」
「もうそれで便秘が全然違うようになるわ」
便秘に関してかなり重点的に話していた。

第四章

「それだけでね。もうかなり違うわよ」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「今朝起きたらすぐに走ってるじゃない」
彼女が言うのはそこだった。二人で走っている。朝とはいえ女一人だと物騒なのと二人の方が楽しくすることができるからである。
「だから走ってる時にきたら」
「辛いってわけね」
「だからそれはね。ちょっと」
「そうね。考えたらね」
智巳もそれを言われて気付く。気付いて苦笑いになる。
「それはまずいわね」
「だからそれはなしにしましょう」
あらためてこう提案する真由子だった。
「残念だけれど」
「一応公衆便所もあるけれどね」
「それでも辿り着くまでに来たらね」
「地獄よ」
一言で充分の話であった。
「そうなったらね。私も経験あるから」
「そうなの」
「帰るギリギリでね。来たことがあるわ」
真顔だった。どうやらこれは彼女にとって辛い思い出らしい。
「慌ててトイレに入ってね。本当に間一髪だったわ」
「危なかったのね、本当に」
真由子はそれを聞いて半分以上我が身のことのように思った。こうした話は無意識のうちに感情移入してしまう。彼女もまた同じだ

ったのだ。
「聞いていて冷や汗が出るわ」
「怖いでしょ」
「下手な怪談よりもね」
見れば彼女もまた真顔であった。
「怖い話ね」
「だから。これはやめておいた方がいいわね」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「やっぱり運動と食生活なのね」
今度はこれを言うのだった。
「ダイエットにも便秘にも。それなのね」
「両方一緒じゃない」
「そうね」
言われてみればそうだった。同じなのだ。
「出たらそれだけ痩せるんだから」
「汚い話だけれどね」
「仕方ないじゃない。それでも健康な証拠よ」
「言ってしまえばそうだけれど」
「それに真由子」
彼女自身に対して言ってきたのだった。
「何？」
「あんた、痩せたわよ」
にこりと笑って真由子に言ってきたのだった。
「早速ね」
「痩せたかしら」
「ええ、それもかなりね」
こうも彼女に語る。
「痩せてきたわよ。いい感じよ」
「だったらいいけれど」

「体重は計ってるわよね」
「毎日ね」
これは欠かしてはいなかった。ダイエットならば当然である。
「やってるわよ」
「いいわ。それで何キロ痩せたの？」
「三キロ」
お風呂の中から右手を出して三本指を見せて答えてみせた。
「三キロ痩せたわ」
「目標は何キロの減量なの？」
「十キロ」
こう答える。
「そこまで考えてるんだけれど」
「もう三キロね」
「まだ三キロじゃないの？」
「いいふうに考えるのがコツよ」
優しい笑みで真由子に語る。
「こうしたことはね」
「だからもう三キロなの」
「まだ、って考えるのともう、って考えるのとで全然変わってくるからね」
「気の持ちようでも全然違うのね」
「これ、考えたことないでしょ」
このことも真由子に対して尋ねるのだった。
「まだとかもうって」
「ええ、私はどっちかっていうと」
視線を斜め上に右から左に泳がせる。考えている目であった。
「まだ、って考えるから」
「人によるけれど真由子にはよくない考えね」
「そうなの」
「引っ込み思案だとね。余計にしんどいわよ」

真由子に教える。
「だから。ここはね」
「もう三キロって考えるのね」
「あとたった七キロ」
こうも言う。
「頑張ってね。たった七キロだから」
「わかったわ。じゃあ智己」
「何？」
今度は彼女が真由子の言葉に顔を向ける番だった。
「あんたの目標は何キロなのかしら」
「五キロね」
こう答えてきた。
「それが目標よ」
「五キロか。私の半分ね」
「そうね。完全に半分ね」
「じゃあもうすぐじゃないの？」
ここまで聞いて智巳に尋ねた。
「今三キロ痩せたから」
「残念だけれど私は二キロも痩せていないわよ」
「えっ、そうなの」
それを言われて目を丸くさせる。
「同じだけ動いていて同じものを食べてるのに」
「体質よ」
今度言うのはそれだった。
「体質なの」
「そう。真由子は油断するとすぐ太るでしょ」
「ええ、まあ」
その通りだった。完璧なまでに当たっていた。
「そういう体質なのよ。だから困ってるのよ」
「それはかえっていいのよ」

「いいの！？」
「言い換えればすぐに痩せられる体質よ」
こう真由子に述べる。
「簡単にね」
「簡単に」
「そうよ。だってもう三キロも痩せたじゃない」
そのうえでこうも言ってきた。
「だから。あと七キロだってすぐよ」
「すぐなの」
「だから安心して。痩せるのは私より楽だから」
「わかったわ。それにしても智巳」
「何？」
「私がダイエットする理由は結婚だけれど」
ウェディングの為だ。これははっきりしている。
「けれど智巳はどうしてなの？もう充分痩せてるのに」
「それは秘密よ」
しかしそれについては笑って答えようとしない。何かを明らかに含ませた怪しい笑みであった。それをわざと見せてきたのである。
「秘密。いいわね」
「秘密主義なのね」
「ええ。その時になったら言うわ」
しかしこうも言うのだった。
「その時にね」
「その時って」
「絶対に言うから」
一応はこれは保証してみせるのだった。
「それは安心してね」
「安心って。そういうものじゃないと思うけれど」
「まあとにかく。ダイエット頑張りましょう」
「ええ、まあそれは」

これに関しては異論はない。彼女もそのつもりだ。
「御願いするわ。こちらもね」
「ええ。それじゃあ明日もね」
「まずはランニングからね」
「そういうこと。最近身体軽くなってきたでしょ」
「ええ。特に」
真由子は気付いた顔で答える。実際にあることに気付いたのだ。
「走ってる時に。重さが消えたし」
「それだけじゃないでしょ」
「滑らかに動けるようになったわ」
こうも答えるのだった。
「何か。軽くなったのはわかるけれど」
「寝る前にストレッチしているからよ」
「ストレッチなの」
「そう。運動はいいけれど怪我をしたら何にもならないじゃない」
基本中の基本だった。それを押さえつつやっているのが智巳である。
「だから。ストレッチもしておかないと」
「それで私にそれも勧めたのね」
「そういうこと。あれって身体を柔らかくするじゃない」
「ええ」
これについては真由子も知っていた。彼女もそれ位の知識は備えているのだ。

第五章

「関節もね。だから」
「動きが滑らかになるのね」
「わかったわね。その分速く動けて」
「余計にカロリーを効率よく消費する」
「そういうことなのよ。ただ食事制限して身体を動かすだけがダイエットじゃないの」
そこまで見ているのだった。かなりのものである。
「そういうことも大事なのよ」
「成程ね。奥が深いのね、ダイエットも」
「何事も一日においてならずよ」
ここで智巳はこう言った。
「ダイエットもね」
「効率よく総合的に長くやるのね」
「自分のできる範囲でね。無理はしたら駄目」
これもプラスする。
「続けられないからね」
「そうなの」
「まああんたは一時期だけ？痩せたいの」
「ううん、やっぱりそうね」
少し考えてからその質問に答える。
「やっぱりずっとね」
「ずっとなのね。じゃあ運動は続けてね」
「ええ」
「食べ物は緩やかにしていいから」
「食べ物はいいの」
「幾ら何でも旦那さんに玄米とかは強制できないでしょ」
少し苦笑いになっての言葉だった。やはりお米といえば白米であ

る。その常識があるからこそあえてこのことを言うのであった。
「やっぱり。ただお菓子はね」
「気をつけるのね」
「そう、特に間食は駄目」
「わかったわ」
「飲み物も気をつけてね」
「お砂糖を入れないことね」
このことは忘れなかった。真由子もしっかりしていた。
「それなのね」
「そうよ。それは忘れたら駄目」
念押しだった。
「絶対にね」
「わかったわ。じゃあそれもね」
「ええ。あとは食べ過ぎないことね。しっかり食べるのは大事だけれど」
それははっきりと分けるのだった。
「それを守ればいいから」
「わかったわ。じゃあまずは結婚式ね」
「楽しみにしてるわ」
智巳の目が細くなってそのうえで垂れ下がる。普段は少しきつい感じなのに今は全く別人に見える。穏やかで心から優しげな感じであった。
「その時をね」
「期待していてね」
二人はお風呂に入りながら話をしていたのだった。それから暫く経って式の当日になった。そこには見事なまで奇麗に痩せた真由子がいたのだった。
純白の奇麗なウェディングに身を包んでいる。白いヴェールもよく似合っている。見違える程痩せた彼女は幸せそのものの笑みを浮かべてそこにいるのだった。

「あれ、新婦さんって」
「あんなに奇麗だったかな」
参列者達はその真由子を見てひそひそと話をしている。彼等も驚いているのだ。
そして横にいる新郎も。彼はにこにことして彼女に声をかけてきた。
「よく似合ってるよ」
「有り難う」
真由子も彼と同じ笑みで夫になる若者に言葉を返した。
「そう言ってもらえて嬉しいわ」
「何か凄く奇麗だし」
「奇麗になったのよ」
目を細めさせての言葉だ。
「努力したから」
「そうだったんだ」
「そうよ。このドレス奇麗な姿で着たかったの」
自分のウェディングドレスを見つつ言う。
「どうしてもね」
「そうだったんだ」
「ダイエットも上手くいったし」
そのことも述べる。
「そのおかげで」
「よかったね。僕にとってもね」
「貴方にとっても？」
「だって。奇麗な君を見ることができたらね」
「もう、そんなこと言って」
二人は完全におのろけになっていた。しかしそれだけではなかった。話はそれだけでは終わらずそこにあらたな出演者がやって来たのだった。
「おめでとう」

「智巳」
智巳が来たのだった。赤いドレスを着てにこりとした笑みを真由子に向けていた。
「よく似合ってるわ」
「有り難う。そう言ってもらえて何よりよ」
「そうなの」
「ええ。ダイエットのかいがあったわね」
「あんたのおかげよ」
満面の笑顔で智巳に対して言う。
「そのおかげでね」
「そう言ってもらえると有り難いわ。ただ」
「ただ？」
「私の為でもあったのよ」
優しい笑みを浮かべつつ真由子に対して言うのだった。
「実はね」
「そうだったの」
「驚かないのね」
「だって。智巳も一生懸命やってたじゃない」
彼女はそこを指摘するのだった。
「それを見ていたらわかるわよ。あんたもダイエットしたいんだって」
「そうなの」
「しっかり何キロ痩せたかまでチェックしていたしね」
そのことも告げる。実際のところ智巳もまた必死なのは事実だった。
「そういうの見ていたからね」
「そうだったの」
「そうよ。それでね」
そのうえでまた言う。
「聞かせてくれるかしら」

「ああ、あれね」
その言葉を聞いて頷くのだった。彼女が何を言っているのかわかっていた。
「そうよ。どうしてあんたもダイエットしていたの？充分スタイルいいのに」
「あんたと同じ理由よ」
今度はにこりとした笑みになった。
「実はね」
「それじゃああんたも」
「そうよ。もうすぐよ」
そういうわけだったのだ。彼女もまた。
「私もね」
「そうだったの。何か」
「あえて内緒にしていたの」
親友に対してもだった。
「この時の為にね」
「もう、意地が悪いわね」
「そのことは申し訳ないけれどこっちもこっちであれこれ考えていたのよ」
こう述べるのだった。
「どうやってあんたを驚かせてやろうかしらって」
「そういうのが意地が悪いのよ。驚かされる方はたまらないわ」
「御免なさいね」
「まあいいわ。それはそうとね」
「ええ」
話が変わる。今度は真由子が智巳に対して言い智巳が真由子に応える。
「何時なの？」
「何時式をするかってことね」
「それももう決まってるのよね」

「少し先だけれど二ヶ月後よ」
「そう、二ヶ月後ね」
「ええ。それじゃあその時には呼んでね」
「勿論よ。あんたを呼ばないと話にならないわ」
こうまで真由子に言ってみせる。
「それはね」
「じゃあ二ヵ月後ね」
話が決まった。
「楽しみにしておくから」
「二ヵ月後楽しみにしておくわ」
智巳も真由子に対して言ってきた。
「二人で来てね」
「勿論よ。それにしても」
「今度は何なの？」
「あんたの旦那様ってどんな人かしら。それと今よりもじっと奇麗になったあんたも」
「どっちも見たいのね」
「ええ、そうよ」
笑って述べる真由子だった。
「それでいいわね」
「勿論よ。二ヵ月後よ」
「ええ、二ヵ月後にね」
話はこれで終わった。こうして二人は二ヶ月後の智巳の結婚式も約束した。ウェディングは仲良く進んだ。それは二人にとっては楽しいものになった。ダイエットの苦労のぶんだけ。

ウェディングは華麗に　　完

2008・5・24

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8045e/

ウェディングは華麗に

2010年10月8日15時04分発行